

関東大震災後における故郷との対峙 —芥川龍之介『本所両国』を分析対象として—

A study about seeing a hometown after the Great Kanto earthquake
—The case of “HONJYO RYOGOKU” written by Ryunosuke AKUTAGAWA—

時空間デザインプログラム
10M43103 熊澤遼 指導教員 齋藤潮
Environmental Design Program
Ryo KUMAZAWA, Adviser Ushio SAITO

ABSTRACT

The purpose of this study is to analyze emotions of Ryunosuke AKUTAGAWA when he saw his hometown of Honjyo after the Great Kanto earthquake. He lived in Honjyo and left there when he was 18 years old. When he returned to Honjyo, it was after the Great Kanto earthquake. This means that he was not in position to know anything about Honjyo during his absence including this earthquake. The results are as follows: First, he felt that the life in Honjyo during his childhood must have connected with that past, especially Edo period. It also made him relieved because his Honjyo's family liked Edo culture. Second, he felt that the various elements found in Honjyo have reminded him of his childhood. He noticed that it is important for us human beings to connect to everyone, and he sometimes imagined widely about childhood using some people. Thus, he tried to fulfill the memory of his absence in hometown Honjyo.

第1章 序章

1-1 研究の背景

都市は時代の流れに伴いその様相を大きく変える。特に大災害は長い年月をかけて関係を築いてきた故郷の空間を一変させる。災害によって一瞬のうちに大きく変わってしまった際、人は故郷とどのように向き合うのか。またその向き合う行為にはどのような意味合いが含まれているのか。本研究の問題意識をここに置き、文豪芥川龍之介（以下、芥川）と彼の作品『本所両国』を用いて、上記に関する考察を試みる。『本所両国』は1927年の東京日日新聞夕刊の連載企画『大東京繁昌記』の作品の一つで、芥川が変わり果てた本所と対峙しながら様々なものに想いを巡らす描写がある。後述するように本所は芥川にとって故郷であり、またこの情景描写の裏には、芥川がかつて過ごしていた震災前の故郷本所との間に作られた繋がりを自分自身で確認する行為が含まれていると考えることができる。

1-2 研究の目的

本研究はまず、芥川は震災前の故郷本所との繋がりを確認しようとしていたという意識の下、『本所両国』の情景描写を解説する。更に芥川の回想や想像を通じて震災後の故郷との対峙が意味するところを明らかにすることを、本研究の目的とする。

また芥川にとっての当時の本所は「関東大震災で変わった故郷」というだけでなく、「しばらく離れていたことで久方ぶりの故郷」という意味も持つ。つまり芥川の中では本所の変化を「震災に伴うもの」「空間的な隔離とその間の時間経過に伴うもの」の両面で感じ取っており、本研究はこの点に留意して以降の分析を進める。

1-3 研究の位置付け

災害の記憶に関するものとして相澤¹の研究、文学作品から都市を解説するものとして吉村ら²の研究、芥川作品にある建築空間に関するものとして都築ら³の研究、生活史と生活風景に関するものとして尾野ら⁴の研究がある。本研究は、①文学作品を扱う上で災害前の故郷との繋がりをどのように探しながら対峙していたかに着目した点、②芥川にとっての故郷本所が、関東大震災で変わった面と自身がしばらく離れていた面の両方を持っていることに着目した点、以上の2点で独自性がある。

1-4 研究の構成

第2章では、芥川関連の既往研究や資料を用いて、芥川の生い立ちと『本所両国』の概要を整理し、第3章では、芥川の生前や本所にいた間、本所を出てから震災後に戻ってくるまでのそれぞれの期間に起こった本所での出来事や変遷について、辞典や区史、地誌等を用いて明らかにする。第4章で

は、第3章で明らかにした本所の経年変化と芥川の生涯との関係を基に、『本所両国』の記述内容から芥川の情景描写をシーン別に把握し、第5章では、第4章で明らかにした確認行為の概要を基に、その行為の芥川における意味を分析し、芥川が故郷と対峙する中でどのように過去に築いた本所との繋がりを探索していたかについて言及する。最後に第6章を結論とする。

第2章 芥川と『本所両国』の概要

2-1 芥川の生涯と居住場所

芥川は1892年に京橋区入舟町に生まれた。しかし母の情緒不安を理由に、生後まもなく本所区小泉町にある母の実家に預けられ、そこで18年間生活した。その後本所を離れて居を転々とした芥川は、『本所両国』の新聞連載が始まってから2か月後の1927年7月に自殺を図り、35年の生涯を閉じた。芥川はこの『本所両国』を始め、『大川の水』という作品でも自分の生誕地を京橋ではなく本所と偽っているが、ここに幼少期を過ごした本所の家こそ芥川にとって心理的に生家に等しかつたとする見方がされている⁵⁾。

2-2 芥川の人物像

2-2-1 震災前の芥川

芥川が預けられた本所の家は代々江戸幕府の御奥坊主をつとめた旧家で、家族の江戸趣味が濃い環境であった。そこで芥川は幼少期から江戸文化に親しみ、また教育熱心な伯母の下で大量の書物に触れながら、後の文学作品の題材となる知識を蓄えていった。

2-2-2 震災後の芥川

震災直後に近隣の人々が互いの無事を確認し合っている光景を見て、人との関わり合いが持つ温かさを芥川は再認識した。また当時世間で叫ばれていた天譴論や自身も所属していた自警団への批判を行い、人間存在の尊厳を意識していた。更には川端康成らと吉原へ死体見物に行くなど、震災の惨事から目を背けず冷静に向き合おうとしていた姿勢も見ることができる。

2-3 『本所両国』の場所と関東大震災

芥川が18歳までの幼少期を過ごした本所区は、関東大震災における旧東京市の総死者数の8割以上を占める被災地であったが、当時芥川は田端の家にいたため、大きな被害を免れた。また『本所両国』の執筆に際し、芥川は図の青線で示したルートを通ったと考えられる。なお本ルートは、参考資料⁶⁾に掲載のルートを基に、不明瞭な箇所を現地調査によって補った《図1》。

2-4 『本所両国』の執筆過程

東京日日新聞社芸部に所属し『本所両国』の企画で芥川と共にコースを周った沖本常吉は、『本所両国』の前半は自分の口述筆記であると述べている。後半部分については分かっていない。しかし沖本の記述からは、芥川が自分の故郷を巡る旅を複数回に分けて行っており、なるべく時間を置かずに自分が見たものを自分の言葉で文章に残そうと心がけながら『本所両国』を作成していたことが伺える。

2-5 シーンの区分

『本所両国』は15個の章から構成されており、各章には

まとまりを持った場所の描写がある。そこで本研究では『本所両国』の1章を1シーンとして分析を行うこととする。

なお、最終章(方丈記)はコースを周り終えた芥川が家族と語り合う内容であるため、本研究の対象外とした。《表1》

表1 分析対象とするシーンの抽出

『本所両国』の各章	シーンの名称と表記
「大溝」	【①大溝】
両国	【②両国】
「富士見の渡し」	【③富士見の渡し】
「お竹倉」	【④お竹倉】
「大川端」	【⑤大川端】
「一銭蒸気」	【⑥一銭蒸気】
乗り継ぎ「一銭蒸気」	【⑦乗り継ぎ一銭蒸気】
柳島	【⑧柳島】
萩寺あたり	【⑨萩寺あたり】
「天神様」	【⑩天神様】
錦糸堀	【⑪錦糸堀】
緑町、亀沢町	【⑫緑町、亀沢町】
相生町	【⑬相生町】
回向院	【⑭回向院】
方丈記	—

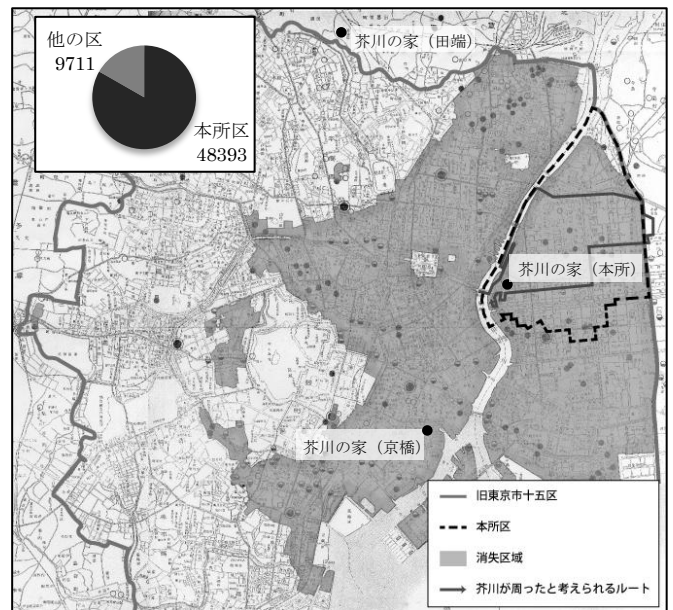


図1 旧東京市の死者数及び消失区域と『本所両国』の場所

第3章 『本所両国』の対象地変遷

3-1 分析の方法

『本所両国』で登場する場所の変遷を明らかにする上で、資料としては辞典や区史、地誌等が挙げられる。しかし資料によって年度の記載の有無や数字の差異等のばらつきがあるため、本研究では文学作品を始めとする多くの資料を網羅的に調査して年度や史実が書かれている『江戸文学地名辞典』『東京文学地名辞典』を基本に、補足として他の資料を用いることとした。

また場所の特定は、筑摩書房『芥川龍之介全集 4』の最終頁に掲載の地図を基に、地図上からその場所を確認した。

3-2 作中の空間要素の変遷

『本所両国』の中に登場する本所の空間要素の中で諸資料を用いて経年変化が追えるものを分析し、結果を纏めた。要素の多くは芥川が本所を離れてからも形姿が変わらずに、関東大震災で焼失又は変容したという傾向を読むことができる。

3-3 本所七不思議

本所七不思議は江戸時代から本所に根付いている伝承である。明治末には知っている人もわずかとなってしまいが、芥川にとっては、彼の回想には必ず出てくると言われるほどに馴染み深いものであった。中でも「片葉の葦」や「落葉なき椎」、「津軽家の太鼓」の話の舞台となった場所やその描写は『本所両国』にも登場している。

3-4 本所の市電

芥川が本所を離れる直前頃から市電が普及しており、離れてからもその路線網は広がり続けた。（以後に掲載の《図2》を参照）

第4章 『本所両国』の情景描写把握

4-1 シーン別の情景描写

本節では芥川がどのように幼少期の故郷と繋がっていることを実感として得ようとしていたか、その確認方法を明らかにすることを目的に情景描写の解説と考察を行う。本稿では例として【①大溝】の情景描写の考察を挙げる。

芥川は、鉄橋の両国橋を渡りながら対岸のバラックを眺めることで「流転の相」という言葉を強く意識し、「大溝」という空間を回想した。回想の中では、幼少期に遊んだ慣れ親しんだ空間としての「大溝」と叔父がいた維新前の頃の知らない空間としての「大溝」が共に出てくる。明治政府へ対抗するために彰義隊へ入ろうとしていた叔父との繋がりが「大溝」は、芥川にとって幼少期に遊んだ場所としてだけでなく江戸という時代から脈々と続いている空間でもあった。

4-2 小結

4-2-1 繋がりの確認方法

これまでの内容を基に、芥川は故郷本所との繋がりをどのように確認していたかについて纏める。眼前の対象の過去に纏わることを直接想起することの他に、「回想や想像を生誕以前に遡らせることで幼少期の故郷は過去との繋がりを持っていることを認識する」方法（以下、{深い根}）と、「イメージや記憶を他の対象に及ぼせることで、広範囲に存在する幼少期の要素を繋ぎ合わせる」方法（以下、{広い根}）の二種類を見ることができた《表2》。前述の【①大溝】は{深い根}が該当するが、これは以下の解釈に因るものである。

叔父という存在を介して、幼少期に自分が慣れ親しんでいた大溝は叔父がいた頃の江戸時代から繋がっていることを意識している。

4-2-2 本所を離れた影響

1-2でも述べたように、芥川にとっての本所には「関東大震災で変わった故郷」と「しばらく離れていたことで久方ぶりの故郷」という意味がある。しばらく故郷を離れていたことについて、『本所両国』の14シーン全てにおいて市電の描写が出てこない点は注目し得る。唯一【⑧柳島】に

「この吾妻橋から柳島へ至る電車道は前後に二三度しか通った覚えはない。まして電車の通らない前には一度も通ったことはなかつたであらう。一度も？——若し一度でも通つたと

すれば、…」

と電車道の描写があるが、記憶があいまいな上に仮に事実であってもそれは電車が通る前の話であることが把握できる。

3-4から分かる通り、芥川が本所を離れる直前頃から市電が普及して

おり、現在のような路線網になった当時の変わりゆく状況を芥川は体験していない。本所に居続けていたならば経験し、記憶として残っていたと考えられる市電に纏わる情報が本所を離れたために欠落しており、そのため【⑧柳島】の描写では時代を更に遡った父の江戸時代の話に繋がることになったと解釈できる。なお、図中の破線は明治44年までの路線網、実線は明治44年以降に拡張された路線である《図2》。

表2 確認方法の有無

シーン	{深い根}	{広い根}
【①大溝】	○	
【②両国】	○	
【③富士見の渡し】	○	○
【④お竹倉】	○	○
【⑤大川端】	○	○
【⑥一銭蒸汽】	○	
【⑦乗り継ぎ一銭蒸汽】	○	○
【⑧柳島】	○	
【⑨萩寺あたり】	○	○
【⑩天神様】	○	
【⑪錦糸堀】		○
【⑫緑町、亀沢町】	○	
【⑬相生町】	○	○
【⑭回向院】	○	○

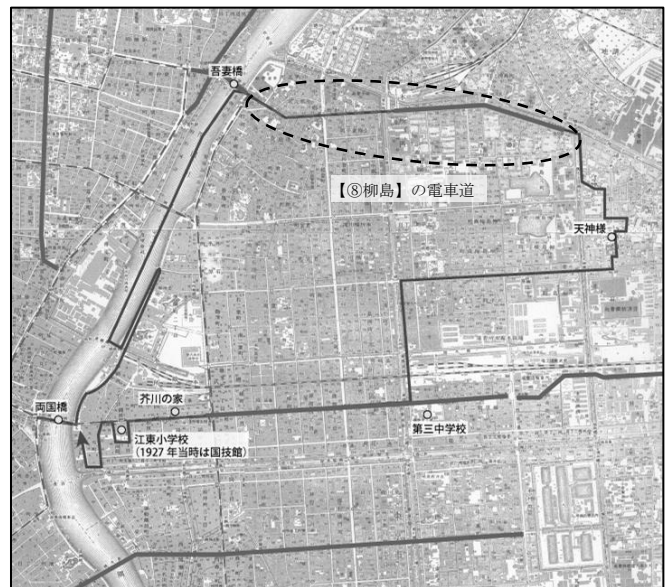


図2 本所周辺の市電の路線網と変遷

第5章 考察

5-1 芥川の特徴整理

2-2では芥川の人物像について、震災の前後で分けて整理した。震災前は預けられた本所の芥川家で江戸志向を育ててきたこと、震災後は人同士が関わり合うことの素晴らしさを強く実感したことを示した。また前節4-2では芥川の中で本所を離れていた影響について考察するために、例として市電の話を取り上げた。【⑧柳島】の電車道の描写から伺えるように、本所を離れていた間の本所の情報が芥川の中で欠落している可能性があることが分かった。

5-2 芥川の不安

本節では芥川が本所を周った際に抱いていたとされる不安について、『本所両国』の描写から考察する。本文全体に目を向けると、第1章「大溝」には芥川の生い立ちや本所の概要が記されており、また本研究で分析対象から除外した最終章「方丈記」には芥川が本所を周った感想が記されている。更にこの二つの章が新聞連載の初日と最終日である点を考慮すると、実際に芥川は「大溝」と「方丈記」の中で自分の不安感を読者に伝達する目的意識を持って書き綴ったことが考えられる。この観点で再度「大溝」に着目すると、本文中にもあるように「流転の相」を強く意識することで、幼少期親しかった叔父とその叔父と自分自身の双方に縁のある大溝を回想していることが分かる。親しかった叔父は江戸時代に大溝で竿を伸ばしており、自分自身は当時の状況を知らないものの、その情景が流転の相に驚きと戸惑いを隠せない芥川に安堵感を齎したと解釈できる。また最終章「方丈記」も、「方丈記」の一文を持ち出して本所の変化にひたすら驚き無常を感じたことを延々と家族に語っていることが把握できる。

芥川が震災後の本所を周って抱いた印象を一言で表すところの「流転の相」と言える。芥川は変化の激しさに只々戸惑い、心の安寧を求めようとしていたことが、少なくとも「大溝」と「方丈記」の章から伺い知ることができる。

5-3 対峙行為の意味

前述のように芥川には、本所を離れ、そのために当時の本所の状況を把握していない期間がある。更に、その期間中には幼少期の故郷から形姿を大きく変えてしまった関東大震災も起こった。この期間を空白期間と呼ぶことにすると、幼少期の生活との繋がりを求めていた芥川にとって、空白期間は知らない本所と激変した本所が同居する期間として不安要素であった。

そこで自分の中の不安をかき消すために取った手段の一つが、4-2で挙げた{深い根}である。特に江戸時代は親しかった叔父や父が過ごしていた時代であった。また本所七不思議や伝統芸能の知識や経験が、空白期間を経ても揺るぎないものとして安定しており、芥川に安心感を与えた。この江戸という時代が芥川に与えた安心感は、2-1でも挙げた実母の発狂が大きな要因として考えられる。芥川は、実母の情緒不安を理由に預けられた本所の家で養父母に帰属していることで、安堵を覚えていたと言われている⁸。つまり、本所の家で江戸的な物への趣向を深めたことで、実母の恐怖との対比の中で江戸に心の安定を求めることを芥川自身が行っていた可能性が考えられる。そして手段の二つ目が、{広い根}である。眼前の対象から別の対象へイメージが拡大できることで、幼少期の本所生活は幅広い領域で営まれていたことを実感し、安心感を得ていた。特に友人や親戚を介してイメージを拡張していることが多く、これは2-2で述べたように、人間の繋がりが持つ温かみを震災後に再認識したことで、人間の存在がイメージの拡大以外に芥川に安ど感を与える要素としても作用していたことが大きいと考えられる。

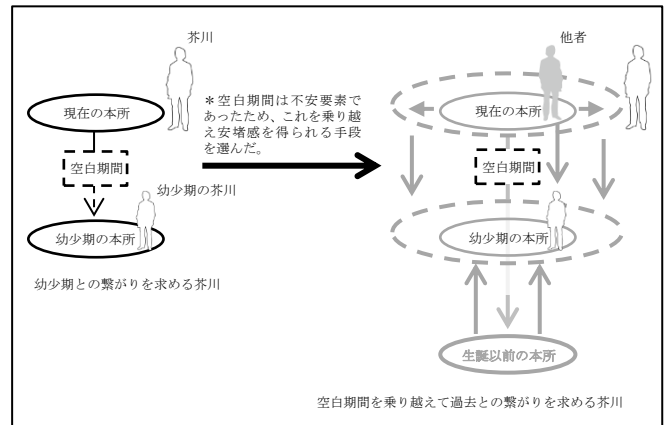


図3 芥川が行った故郷との対峙

第6章 結論

6-1 結論

芥川は、故郷と対峙する中で自分の幼少期の本所との繋がりを求めるために、眼前のもの過去をそのまま想起する以外に、回想や想像を生誕以前に遡らせることで幼少期の故郷は過去との繋がりを持っていることを認識する方法（{深い根}を求めること）とイメージや記憶を他の対象に及ぼせることで、広範囲に存在する幼少期の要素を繋ぎ合わせる方法（{広い根}を求めること）を行っていた。前者{深い根}の特徴は江戸時代への回帰であり、後者{広い根}の特徴はイメージを広げる際に他者の存在を認識することである。江戸回帰と他者認識はそれぞれ、幼少期の家庭環境と震災後に育んだ新たな価値観が大きく関係しており、芥川のアイデンティティの産物であると言える。芥川は震災後の故郷に足を踏み入れて幼少期の証を求める中で、同時に35年の人生が育んだアイデンティティの根を故郷に植え付けていたと考えることができる。

6-2 研究の課題

■本研究は芥川という一作家の文学作品のみを分析対象としているため、結論で述べた内容は普遍的なものではない。つまり本研究で明らかにしたことは、数多くいる関東大震災の被災者の中の一人における故郷との対峙の仕方である。

■本研究で明らかにした{深い根}{広い根}は、万人に共通するような一般的な話であり芥川に特化したものではない。また本研究で着目した芥川の中に伴う二種類の本所の変化は区別して分析する必要があったが、『本所両国』の描写から判断することは困難であった。

■芥川は随筆家よりも小説家としての知名度が高く、『本所両国』の描写の中には芥川が脚色を加えて表現した箇所がある可能性も皆無ではないことは、念頭に入れておく必要がある。

1 相澤亮太郎 2008「場所と記憶の地理学—災害空間の変容と場所の再構築—」神戸大学大学院文化科学研究科博士論文
 2 吉村晶子ら 1997「『おくのほそ道』における風景の動的生成手法に関する研究」ランドスケープ研究 60(5), pp.567-572
 3 都築美衣ら 2007「芥川龍之介の作品にみる近代的空間認識」日本建築学会計画系論文集, pp.225-229
 4 尾野薫ら 2010「生活史から読み解く生活風景に関する一考察」景観・デザイン研究梗概集 No.6, pp.132-140
 5 森啓祐「少年龍之介の周辺」『日本近代文学 22号』「日本近代文学会」編集委員会), p.122
 6 『芥川龍之介全集 第十五巻』岩波書店, p.297
 7 東京都交通局『わが街 わが都電』, pp.158-161
 8 6と同じ